

〈原著論文〉

ロシア人日本語学習者における依頼の断り難さと 配慮を構成する諸要因

— ポライトネス理論の観点から —

名古屋大学大学院国際言語文化研究科 院生 ブラーエヴァ マリア
名古屋大学国際言語文化研究科 玉岡 賀津雄

本研究では、ロシア語を母語とする日本語学習者が日本語を学習することによるポライトネスの構造と意識変容への影響を、依頼の断り難さと依頼者への配慮に着目して調査した。ポライトネス理論の枠組み (Brown & Levinson, 1978, 1987) では、ある行為 x の持つフェイス侵害リスク (W_x) の大きさは、相手との社会的距離 (D)、力関係 (P)、 x という行為が特定の文化内でもつ負担の度合い (R_x)、の3つの要因で、 $W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$ と示される (S は話し手、 H は聞き手である)。この理論的な枠組みを使って、依頼に対する断りに影響する諸要因の強さを回帰木分析で検討した。分析の結果、ポライトネス理論の公式で示された諸要因が影響することを支持した。さらに、社会的距離が強く影響し、力関係、依頼場面および言語使用の違いはその次に影響する要因であることが分かった。本研究では、ポライトネス理論の影響諸要因の中で階層性があることを実証した。また、全体としては弱い要因ではあるが、日本語を学習することでロシア語の使用への影響 (逆行転移)、ロシア人としての民族的アイデンティティの維持、目標言語の文化への順応が依頼場面に応じて起こることを示した。

キーワード: 断り、回帰木分析、依頼の断り難さ、相手のフェイスへの配慮、ポライトネス

1. はじめに

外国語教育においては、これまで主に語彙と文法に焦点を当てて授業が展開されてきた。しかし、言葉は、コンテキスト無しに使われることはなく、ある特定の状況で、ある意図と意思をもって発されるものである。そのため、一度、実際の会話になると、語彙や文法だけでなく、置かれた状況や社会・文化的な適切性を考慮して発話されることになる。そう考えると、外国語教育においては、学習者に学習の対象となっている言語の社会・文化的な違いを含む周辺状況についての情報も教えずには、適切な発話が行われなくなることになる。そこで、本研究では、これまであまり研究されてこなかったロシア人日本語学習者を対象に、依頼に対する断りにおける配慮に焦点をあてて、ロシア人と日本人の断りに対するアプローチの違いを調査し、場面に応じた適切な日本語表現について検討することにした。

2. 研究の背景とアプローチ

外国語の学習は、単に言語の学習に留まらない。Tateyama (2001) は、外国語の学習者は、言語学習とともに、これまで気づかなかった社会的要因 (力関係) や心理的要因 (親疎関係) による表現の使い分けやコミュニケーション効果などに意識を向けるようになることを報告している。例えば、日本語を学習する場合について考えると、日本語の語彙や文法の学習と共に、教材などを介して日本の社会・文化に関する習慣や価値観を同時に学ぶことになる。とりわけ、日本の社会・文化においては、失礼の無いように配慮することが求められる。ところが、「断り」は相手の希望や要望に添えない意思の表明であるため、相手の意向に逆らうことになる。こういう場面では、相手の気持ちを傷つけないような適切な表現を選ぶという配慮が必要になる。したがって、学習者に「ポライトネス」を意識するよう教育することが重要になってくる。

本研究では、教育現場で扱われる発話行為の中から、人間関係のリスクを伴う依頼に対する「断り」の状況に絞って検討することにした。断る側は、断る意思を明確に表明しつつ、人間関係を維持するために、相手との関係や場面・状況などに応じて様々な語用論的ストラテジーを使い分ける必要がある(村井, 2009)。しかし、断りに対する配慮表現は文化・習慣によって様々に異なるため、断りの場面で、外国語学習者と母語話者の間で誤解を招くこともある。そのため、断りは、外国語の学習者にとって、高度な語用能力が要求される発話行為であると言えよう(Beebe et al., 1990)。同じ断りの表現であっても、社会文化的な習慣によってその負荷が異なり、断り難さに対する認識も違うと考えられる。とりわけ、ロシアの社会文化では、はっきりと断ることが丁寧であるとされている(Larina, 2009; Raitmar 2003, Prohorov & Sternin, 2007)。そのため、ロシア人の日本語学習者にとって、日本の社会文化で期待されるような婉曲的な断り方をするには、大きな葛藤が生じると予想される。

断りの言語行為では、断ることの意思伝達ばかりでなく、相手との関係維持にも配慮しなくてはならない。Houck and Gass (1999) は、英語は日本語と比べて明瞭な意思伝達が重視される言語であるとしている。Larina (2009) によると、ロシア語では、英語よりも対人距離を小さく取り、個人的自律性 (personal autonomy) を低く保つと述べている。加えて、Larina (2009) は、ロシア語でのコミュニケーションにおいて、儀礼的な丁寧さが否定的な評価を受け、率直さや自然さが高く評価されると指摘している。英語話者よりもロシア語話者の方が、対人距離が小さくなるので、ロシア語では、英語ほど相手に配慮した言葉を示す必要がなくなる。つまり、英語話者の方がロシア語話者よりも、相手に近づけるためのポライトネス・ストラテジーを使用し、ロシア人はむしろ必要な情報を伝達させることに注意を注ぐということである。

日本とロシアの違いについて、Hofstede (1980) の個人主義と集団主義、Hall (1976) の高コンテクストと低コンテクストの二元的な捉え方で見ると、日本もロシアも高コンテクスト、集団主義の

国であるといえる。ロシアは地理的に西洋と東洋の中間に位置し、ロシア人外国語学習者は他の社会・文化における様々な認知様式を積極的に身に付けようとする傾向がある。

実際、ブラーエヴァ (2012) は、断りのストラテジーの使用頻度に焦点を当て、ロシア人日本語学習者、日本語母語話者、ロシア語母語話者の断りパターンを比較した。その結果、ロシア人日本語学習者は、日本語の場合には日本人よりもさらに頻繁に謝罪表現を使用し、「過剰一般化」が起こっていた。さらに、ロシア語で断る際にも日本語母語話者と使用頻度が同じくらい頻繁に謝罪表現を使っていた。これは、日本語を学習したことにより、母語のロシア語にも「逆行転移」が起こったからであろう。

以上のことを考慮して、本研究では、ロシア語と日本語での依頼に対する断りの場面における「断り難さ」と相手に対する「配慮」に焦点をあててロシア人日本語学習者の日本語学習によるポライトネスに対する意識の変容について調査することにした。なお、「配慮」とは、他人に対する気遣いや気配りを意味し、依頼に対する断りの場面では、依頼者に対する「配慮」の度合いを判断してもらうことにした。具体的なアプローチとして、(1) ロシア語しか話せないロシア人、(2) ロシア語を母語として日本語を学習しているロシア人、(3) 日本語母語話者、の3つのグループを対象に、質問紙調査を実施した。この調査データについては、決定木分析 (decision tree analysis) の中の回帰木分析 (regression tree analysis) という多変量解析を使って、断りの発話行為を決める諸要因を総括的・階層的に分析した。

3. ポライトネス理論

Brown & Levinson (1978, 1987; 以下、B & L とのみ記す) は、複雑に絡み合う3つの変数でフェイスの侵害度 (Wx: weightiness of the face threatening acts) を見積もり、 $Wx = D(S,H) + P(H,S) + Rx$ という公式を提示した。この公式によると、ある行為 x のフェイス侵害度 (Wx) は、ヨコの人間関係における話し手 (S) と聞き手 (H) の社会的な距離 (親疎関係, Distance: D), タテの人間関係における聞き手の話し手に対する相対

的な力関係（社会的地位、Power: D）、その行為の負荷度（Ranking of Imposition: R）という3つの要因で決まるとしている（清水，2009；滝浦，2008）。

B & L (1978, 1987) は D と P 以外の W_x に影響するとされるすべての要因を R という抽象的な概念に包括して、R を「culturally and situationally defined ranking of impositions」と説明した。これまでの先行研究（e.g., Hill, Ide, Ikuta, Kawasaki, & Ogino, 1986; 井出, 2006; Matsumoto, 1988, 2003）では、文化的な側面からポライトネス理論を否定する議論がなされている。しかし、B & L の公式では、文化的な側面は主要な要因とはされていない。むしろ聞き手と話し手の社会的距離と力関係が重要な変数であるとしている。文化的な違いなどによる総合的な負荷度である R_x は、独立した変数として設定されている。本研究では、 R_x を (1) 断り場面の内容 (R_i ; intrinsic factor), (2) 話し手と聞き手の言語文化差 (R_c ; linguacultural factor) の2つに分けて、より詳細に検討することにした。

これまで、B & L のモデルを東洋の社会・文化に適用して、妥当性を検討した実証的な研究（e.g., Holtgrave & Yang, 1990; Kiyama, 2011; Kiyama, Tamaoka & Takiura, 2012; Lim & Bowers, 1991; Tamaoka, Lim, Miyaoka & Kiyama, 2010; 鄧, 2012）では、B & L の公式を支持する報告がなされている。とりわけ、Kiyama et al. (2012) は、日本語母語話者同士のフェイスワークに焦点を絞り、二者間で対立する場面の対人行動のあり方について検討した。不快な行動に対する対応に影響するとされる要因を、行為そのものの内容の違い (R_i)、対話者の態度を指す文脈的要因 (R_c)、力関係 (P)、社会的距離 (D)、性差 (G) の5つに設定し、回帰木分析を行った。その結果、状況要因の下位要因である R_i と R_c が、対人関係要因の D と P と個人内要因の G より強い影響力を持つことが示された。さらに対人関係要因群（力関係および社会的距離）は、個人内要因として設定した話者の性差よりも強いことが証明された。Kiyama et al. (2012) は、西欧社会で構築された B & L のモデルにおける対人行動を予測する状況要因と2つの対人関係要因の3つが、概ね日本語母語話者の行動の予測に有効であることを実証した。そこで、本研究

でも、B & L のポライトネス理論を基本的な枠組みとして、依頼に対する「断り難さ」と依頼者に対する「配慮」という2つの側面に焦点を絞って検討した。B & L の R_x を2つに分けて検討するので、本研究では、 $W_x = D(S,H) + P(H,S) + R_i + R_c$ という公式になる。

4. 研究方法

4.1. 調査対象者の設定

2011年5月から6月にかけて、ロシアの大学に在籍し、日本語学習歴の無いロシア語母語話者50名（女性32名、男性18名、平均年齢20歳4ヶ月）、ロシア語を母語とする日本語学習者50名（女性24名、男性26名、平均年齢21歳2ヶ月）、および日本在住の日本人大学生（ロシア語学習経験無し、女性26名、男性24名、平均年齢20歳11ヶ月）50名の合計150名を対象に質問紙調査を行った。日本語学習者は日本語レベルが中上級の3年生から5年生である。ロシア語を母語とする日本語学習者の日本語学習歴は、平均で4年と5ヶ月であった。なお、日本へ留学したことのある学生が27名いたが、日本滞在期間はわずかに平均3ヶ月で、留学というより短期訪問に近い。日本語を学習したことのないロシア人と日本語母語話者には留学経験と日本語能力という条件が設定できないので、本研究では分析の対象としなかった。

4.2. 9つの「断り」の場面の設定と意識調査

本研究では、質問紙調査を行った。表1に示したように、断ることを前提とした依頼場面を9つ用意した。力関係で、目上、同等、目下の3つに分けた。日本とロシアの両方の社会・文化において起こりうるような自然な場面を考慮して依頼者を決めた。ロシアでは、先輩と後輩という上下関係が希薄であるため、先輩を目上としては選ばず、両社会文化であり得るような母親、先生、上司とした。目上は多様な特性があるので、目上の違いを考察することも目的として、異なる3者を選んだ。同等は、同級生、同僚、友達である。一方、後輩は、ロシアでも、年齢や学年が低いという意味で目下と考えることができるので、目下の依頼者はすべて後輩とした。

ここで、目上の上司と同等の同僚は、大学生について想定し難いという指摘がある。実際、多く

表 1 9つの「依頼」場面の設定

場面・依頼の内容 (Wx:負担の度合い)	力関係	依頼者	社会的 距離
1 旅行先で特定の買い物を頼まれた		母親	親 疎
2 研究室の引越しの手伝いを頼まれた	目上	先生	親 疎
3 アルバイト先で宴会の幹事を頼まれた		上司	親 疎
4 講義のノートを貸すことを頼まれた		同級生	親 疎
5 アルバイト先で代理出勤を頼まれた	同等	同僚	親 疎
6 5千円を貸すことを頼まれた		友達	親 疎
7 宿題の手伝いを頼まれた		後輩	親 疎
8 バーベキューの買い出しを頼まれた	目下	後輩	親 疎
9 教科書を貸すことを頼まれた		後輩	親 疎

の先行研究（例えば、ルンティエラ, 2004; 伊藤, 2001a, 2002b など）でも、職場の場面は学生にとって現実的ではないという根拠から、大学生を対象とした調査では外されることが多い。しかし、現実には、多くの日本人大学生や留学生がアルバイトをしており、日本社会での職業経験はある程度持っている。本研究の調査の対象者となったロシア極東の日本語学習者は、日本語通訳者になることを目指している。そのため、日本からビジネスや観光でロシアに来る日本人を相手に、通訳のアルバイトをしているので、大学以外の職場場面でも、日本語を使うことが多い。したがって、アルバイトの場面の3と5の上司と同僚という設定も問題はないと判断した。

さらに、各力関係に社会的距離として親疎関係を追加した。「親」としては、親しい間柄の人であり、「疎」は普段殆ど話すことがない人と定義した。また、場面1の母親については、自分の母親を親しいとし、親しくない母親は、友達の母親とした。なお、場面1と場面6は、日本語版とロシア語版の調査で設定を若干変えた。場面1の日本語版では、北海道に旅行する時に買い物を頼まれる設定であるが、ロシア語版では中国を旅行する際に買い物を頼まれる場面とした。また日本語版の場面6は夏祭りとしたが、ロシア語版では7月に開催されるウラジオストックの開港記念日の祭りとした。行き先と祭りの種類を変えただけなので、場面そのものには影響はないと考える。全調査項目は、社会的距離が3つで、各3つの場面があり、それぞれに親疎関係が2つ追加されるので、18の質問項目(3×3×2)になる。本論文の最後に、資料として場面2の力関係が目上(先生)で、社会的距離が「親」の例を示した。

4.3. 調査の手続

調査対象者に、表1の9つの「断り」の場面について、依頼に対する断り難さと依頼者への配慮を7段階で判断してもらった。質問紙では、まず断りの場面を説明し、調査対象者に対する指示文、さらに最も断り難い場面を7、最も断り易い場面を1とする7段階の評価尺度を提示した。調査対象者には、依頼場面の断り難さについて、自分の考えに最も近いと思われる程度を判断して、数字に○をつけるように指示した。次に、断るに当たり、依頼者に対して配慮すると想定される度合いを、「最も配慮する」を7、「最も配慮しない」を1として、同様に7段階尺度で答えてもらった。ロシア語しか話せないロシア人はロシア語版の質問紙のみを、また日本語母語話者には、日本語版の質問紙のみを用いて調査を行った。ロシア語を母語とする日本語学習者には、授業中に、ロシア語版と日本語版の両質問紙に答えてもらった。その際、ロシア語の母語の影響を受けないように、まず日本語版の質問紙に回答してもらい、その後でロシア語版の調査を実施した¹⁾。質問紙の回答時間は、母語の場合が30分程度で、外国語の日本語の場合が50分程度であった。

5. 分析と結果

本研究では、9つの「断り」の場面について断り難さと依頼者への配慮の度合いの2つを7段階尺度で測定した。両変数は、1から7まで変化する量的な7段階尺度を想定した(従属変数あるいは目的変数)。また、条件(独立変数あるいは説明変数)としては、(1)目上・同等・目下の力関係、(2)親と疎の社会的距離、(3)ロシア語と日本語の使用言語、さらに(4)9つの場面・依頼の内容そのものも変数とした。

この分析の全体をB & Lのポライトネス理論の公式で説明すれば、説明変数の(1)はPであり、(2)はDであり、(3)と(4)はRxである。そして、予測される変数である断り難さと依頼者への配慮の度合いは、それぞれ依頼者へのフェイスの侵害(Wx)のリスクへの意識である。ポライトネス理論の公式が示す通りに、断り難さと依頼者への配慮(Wx)を従属変数として、4つの独立変数(PとDはそれぞれ変数が1つ、Rxは変数が2つ)

で予測する決定木（回帰木）分析を行った。

本研究では、IBM SPSS 19.0 Statistics を使った。決定木分析は、複数の独立変数（説明変数）によって、ある1つの従属変数（予測変数）を予測する多変量解析の1つである。独立変数は質的変数（名義尺度および順序尺度）でも量的変数（間隔尺度または比率尺度）でも分析できる。その結果が木の枝葉のように描かれるので樹形モデルとも言われる。前者にはカイ二乗検定が適用され、得られた樹形図は分類木（classification tree）と呼ばれ、後者にはF検定が適用され、得られた樹形図は回帰木（regression tree）と呼ばれる。本研究では、7段階尺度の断り難さと依頼者への配慮の度合いを予測するので、回帰木分析を使用した。

回帰木の分析結果は、有意に強く予測する（あるいは、有意な影響を持つ）複数の独立変数のうち強いものから順に樹木のかたちで示される。上位にくる説明変数（独立変数）が、予測変数（従属変数）に対してもっとも強く影響し、下位にくる説明変数は有意な予測をするものの、影響力が弱い。有意な予測をしない変数は樹木には現れない。得られた樹木を参照しながら、複数の要因の階層性を視覚的に検討できるのが利点である。本研究のように断り難さと依頼者への配慮について4つの要因がどう影響しているかを同時に階層的に考察したい場合には、最適な多変量解析の手法である²⁾。

5.1. 依頼に対する「断り」の難しさを予測する 回帰木分析の結果

回帰木分析の結果は、図1の樹形図に示した通りである。7段階評価で測定した依頼に対する断り難さの度合いの全体（ $N=3,600$ ）の平均は3.82で、標準偏差は1.79であった。なお、回帰木分析の全体のサンプル数が3,600になるのは、「親」と「疎」の2つが設定された9つの質問に対して（18の質問）、ロシア語母語話者と日本語母語話者（両者は各言語・文化の統制群）はそれぞれの母語について1回であるが、ロシア人日本語学習者が日本語とロシア語の両方に回答しているためである。したがって、18問×4回の回答×50名=3,600となる（欠損値は無い）。図1に示したように、断り難さに最も強く影響したのは、親疎関係を示す社会的距離（D）であった [$F(1, 3598)=$

281.300, $p<.001$]。「親」の関係（ $M=4.30$, $SD=1.74$ ； M は平均、 SD は標準偏差を示す。以下、 M と SD とのみ記す）である方が、「疎」の関係（ $M=3.34$, $SD=1.71$ ）よりも依頼を断り難かったことを示している。社会的距離が強く影響し、そこから「親」と「疎」で別々に枝葉が伸びているということは、親疎で異なる影響関係が見られることを意味している。

まず、親しい相手からの依頼を断る場合の難しさは、グループ・使用言語（ R_i ）の影響が次に強かった [$F(2, 1797)=33.917$, $p<.001$]。回帰木分析では、自動的に有意に異なるグループを判別してくれる。図1を見ると、依頼者が親しい間柄の場合、ロシア語母語話者（ $M=4.68$, $SD=1.83$ ）、日本語・ロシア語でのロシア人日本語学習者（ $M=4.38$, $SD=1.62$ ）、日本語母語話者（ $M=3.77$, $SD=1.75$ ）の順で断り易くなっていることを示している。ロシア人日本語学習者が、ロシア語であろうと日本語であろうと、ロシア人と日本人の間に入っているのは、日本語学習による文化変容を示唆しているのではないかと思われる。なお、ロシア人日本語学習者は、さらに力関係（P）の影響が見られた [$F(1, 898)=35.870$, $p<.001$]。目上の依頼者（ $M=4.82$, $SD=1.64$ ）の方が、同等・目下の依頼者（ $M=4.15$, $SD=1.56$ ）よりも断り難いことを示した。日本語学習者だけが力関係の影響を受けていることを考慮すると、日本語学習の過程で、タテ社会の日本（中根, 1976）のイメージに過剰な反応をしているという可能性も考えられよう。場面・依頼の内容（ R_i ）の影響は、あくまで日本語母語話者だけに見られた [$F(2, 447)=19.820$, $p<.001$]。日本語母語話者だけが親しい依頼者への断り難さを内容で区別していた（詳細は、図1の記述を参照）。

一方、親しくない「疎」の依頼者については、場面・依頼の内容（ R_i ）が断り難さに強く影響していた [$F(3, 1796)=79.436$, $p<.001$]。最も断り難かったのは旅行先で買い物を頼まれる場面1（ $M=4.56$, $SD=1.90$ ）であった。逆に、最も断り易かったのは講義ノートを貸す場面4、5千円を貸す場面6、宿題の手伝いの場面7、教科書を貸す場面9であった（ $M=2.86$, $SD=1.50$ ）。お土産を買ってくることに比べて、モノを貸したり手伝

いしたりするのは、依頼者が大きく回答者の自己意識に介入してくるのか、断り難くなるようである。言い換えれば、自己へのフェイスの侵害が大きくなるとも言えよう。他の場面は、図1に示したように、両者の間に位置する。「疎」の関係は場面・依頼の内容の影響が強かった。さらに、場面によっては、グループ・使用言語 (R_i) の影響が次に来ていた。具体的には、場面1 [$F(1, 198) = 14.072, p < .001$], 場面2と3 [$F(1, 398) = 32.360, p < .001$], 場面5と8 [$F(1, 398) = 19.126, p < .001$] であり、いずれも各言語の統制群である日本語母語話者とロシア語母語話者の間に、ロシア人日本語学習者の日本語あるいはロシア語での回答が位置する。日本語学習者が、場面によってロシア的であったり日本的であったりする様子が伺える(詳細は図1を参照)

5.2. 依頼者に対する配慮を予測する回帰木分析の結果

依頼者に対する配慮を予測する回帰木分析の結果は、図2に示した通りである。図2を見ると、断り難さと同様に、社会的距離の影響が最も強い [$F(1, 3598) = 222.547, p < .001$]。「親」の関係 ($M = 4.21, SD = 1.71$) である方が、「疎」の関係 ($M = 3.36, SD = 1.73$) よりも相手に配慮したことを示している。親しい間柄では、さらに、力関係が依頼者への配慮に影響していた。配慮の度合いは、目上 ($M = 4.54, SD = 1.74$)、同等 ($M = 4.16, SD = 1.70$)、目下 ($M = 3.94, SD = 1.65$) の順番であった。親しい間柄の相手への配慮の必要性は、まさにB & Lのポライトネス理論の公式の通りであり、社会的距離(D)と力関係(P)が強い要因であり、社会・文化的要因の影響は見られなかった。

一方、「疎」の関係の相手に対する配慮には、力関係が影響しなかった。それよりも場面・依頼の内容の影響 (R_i) が強かった [$F(3, 1796) = 90.324, p < .001$]。これは、親しくないことで、依頼者が目上か目下かという力関係が意識から希薄になるせいではないだろうか。場面・依頼の内容では最も配慮が強かったのは、断り難さ(図1)と同様に、旅行先で買い物頼まれる場面1 ($M = 4.78, SD = 1.64$) であった。最も相手に配慮する必要がないと判断されたのは講義ノートを貸す場面4 ($M = 2.72, SD = 1.62$) であった。講義ノー

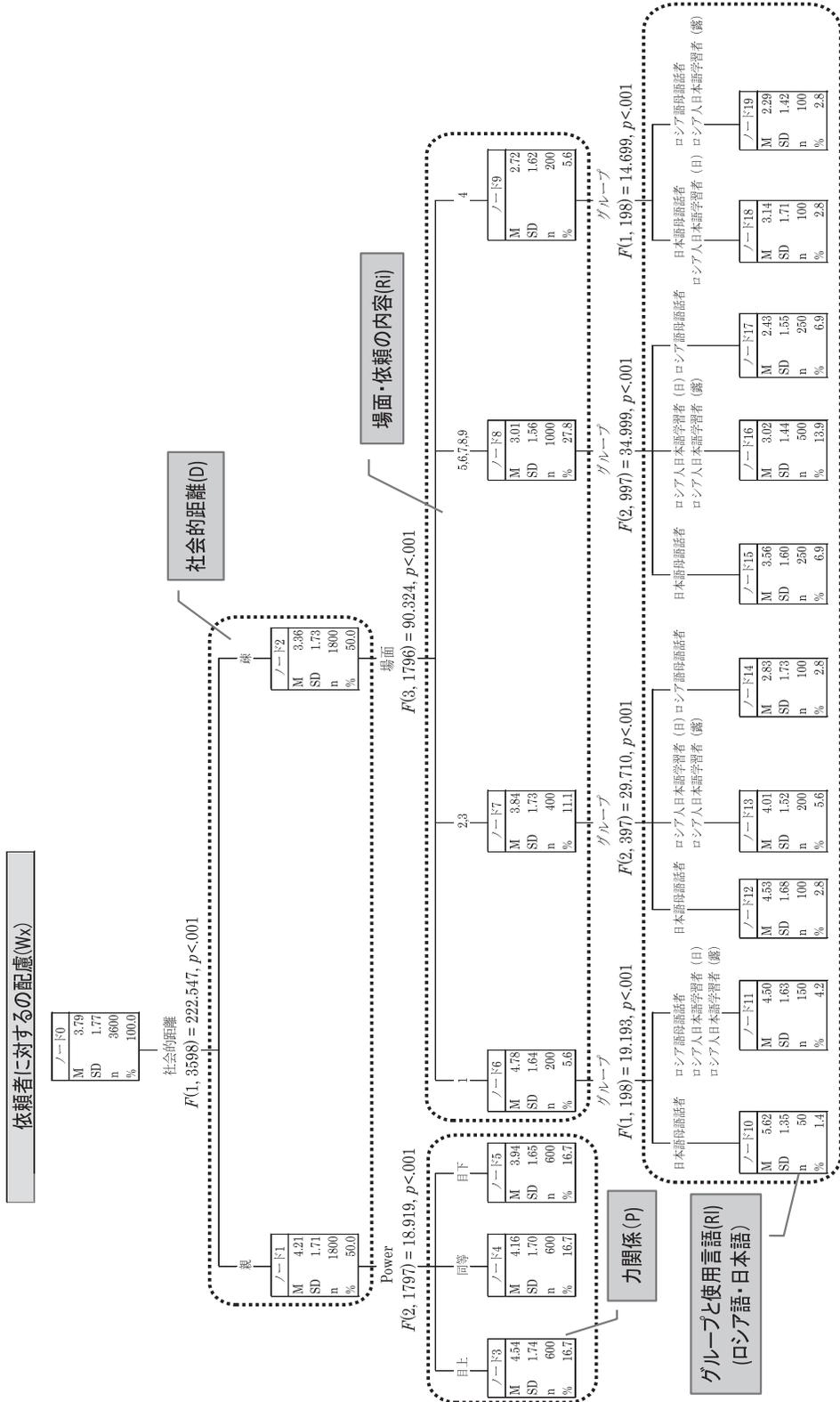
トは、個人が取ったメモであり、他者との共有を拒否する傾向が見られる。場面1と場面4の間に、他の場面が入ってくる(図2を参照)。親しくない「疎」の関係には、次に、グループ・使用言語 (R_i) の影響が見られた。ここで、初めて文化・社会あるいは言語の影響が見られた。場面1では、日本語母語話者 ($M = 5.62, S = 1.35$) は、日本語学習の有無に拘わらずロシア人よりも、相手に対して配慮することが分かる [$F(1, 198) = 19.193, p < .001$]。もっとも相手に対する配慮がなかった場面4でも、日本語母語話者およびロシア人日本語学習者の日本語条件 ($M = 3.14, SD = 1.71$) は、ロシア語母語話者およびロシア人日本語学習者のロシア語条件 ($M = 2.29, SD = 1.42$) よりも相手に対してより配慮していた [$F(1, 198) = 14.699, p < .001$]。図2のグループと使用言語の部分を見ると、すべての場面で、日本人あるいは日本語の関係が、ロシア語およびロシア人よりも、相手に配慮することが分かる。使用言語や社会・文化(グループ)は、影響関係の階層でみると、決して強いとは言えない。

6. 考察

本研究では、B & L (1978, 1987) のポライトネス理論の公式に従い、力関係(P)、社会的距離(D)、場面・依頼の内容 (R_i)、母語の社会・文化的規範と使用言語 (R_i) の4つの要因が、依頼の断り難さと依頼者への配慮 (Wx) にどう影響するかを、回帰木分析を使って検討した。以下、本研究の結果を4つの点から考察していく。

6.1. 断りに対する諸要因の影響

B & L (1978, 1987) が示したポライトネスの公式では、D、P、 R_x の諸要因が並列に扱われている。しかし、少なくとも本研究で扱った「断り」の行為においては、これらの要因間に階層性があることが分かった。まず、社会的距離(D)が最も強く影響し、そこから、「親」と「疎」で異なる影響関係がみられた。「親」な間柄では、断り難さは、社会・文化的規範と使用言語 (R_i) と力関係(P)の影響が次に強い影響要因となった。相手への配慮については、依頼者が目上、同僚、目下であるかどうかという力関係(P)が強く影響するものの、社会・文化的規範と使用言語 (R_i)



の影響はほとんどみられなかった。親しいという人間関係が、社会・文化的な垣根を取り去ってしまったようである。

一方、「疎」の関係では、依頼の断り難さと依頼者に対する配慮の必要性に共通して、依頼者が目上、同僚、目下という力関係 (P) への意識が希薄であった。むしろ、何を依頼されているか (R_i) が重要な影響要因となった。社会・文化的規範と使用言語 (R_j) の影響は、依頼される内容によって異なっていた。こうしてみると、社会・文化的な違いは、「疎」の関係で、依頼のような日常的な日々の行動に見られることが伺える。

6.2. 日本語学習を介したロシア的対応への影響

外国語を学習することで、逆に母語に影響するという「逆行転移」が指摘されている (Blum-Kulka & Sheffer, 1993)。すでに断りに対する階層的影響関係で議論したように、社会・文化的規範と使用言語 (R_j) の影響は、特定の条件に限られている。それでも、ロシア語を使用し (ロシア語版)、社会的距離が「疎」の場合に、場面2の先生からの研究室の引っ越しの手伝いおよび場面3の上司からのアルバイト先での宴会の幹事を頼まれた条件では、断り難さと相手への配慮の両方において、ロシア人日本語学習者のほうが日本語を学習していないロシア人よりも、断り難く、より配慮するという結果であった。

この理由は、ロシアの日本語教育の現場では、日本が縦社会 (中根, 1978) として紹介され、「疎」の関係においても目上の人を立てるべきだと教えられているからだと思われる。場面2は「先生」であり、場面3は「アルバイト先の上司」である。そのため、目上の人達に丁寧でなくてはならないという意識が日本語を学習することによって培われ、日本語を学習していないロシア人よりも丁寧になったと考えられる。つまり、日本語を学習することにより、対人関係の意識が母語のロシア語へと逆に影響するという「逆行転移」の傾向が生じたといえよう。これは、日本で日本語を学習していると、ロシア人が、日本ばかりでなく祖国のロシアに帰国しても、過剰に丁寧になるといわれることとも共通しているようである。

ただし、母親の依頼に対する断りについては、顕著な文化的違いがみられた。ロシア人日本語学

習者の場合、「疎」の関係にある友人の母親 ($M=4.27$) よりも、「親」の関係である自分の母親 ($M=4.82$) からの依頼のほうが断り難かった。しかしその差は、わずかに $M=0.55$ である。一方、日本語母語話者の場合、自分の母親 ($M=3.26$) からの依頼は容易に断ることができる。しかし、友人の母親 ($M=5.40$) だと断るのが非常に難しい。その差は、 $M=2.14$ と非常に大きかった。これは、友人の母親は目上であり、なおかつ友人との関係が維持され続ける限り、母親との関係も継続され、さらに、友人と母親とが切り離せない存在となり、自分の評価が身近な人的ネットワークの中で流布される可能性があるからであろう。このように日露の母親の関係の違いが顕著にみられた。

6.3. ロシア人日本語学習者の断りに対する日本語とロシア語の区別

学習者が自分の民族的アイデンティティを維持しながら、外国語使用者としての独自性を確立したい場合、目標言語の基準に則して行動しないこともあるという指摘もある (清水, 2009)。本研究の回帰木分析では、ロシア人日本語学習者が、日本語を使用しているにもかかわらず、日本語母語話者よりも日本語を学習していないロシア人に類似した反応を示した場面があったことから伺える。具体的には、社会・文化的規範と使用言語 (R_j) は、「疎」の間柄で主に見られ、断り難さでは場面1でのみであるが、相手への配慮においては場面4以外のすべての場面で見られた。そのため、相手への配慮の必要性という点からみると、ロシア人であることアイデンティティは、目標言語の日本語とは関係なく、ロシア人日本語学習者に深く根付いており、日本語を学習したからと言って容易に変わるものではなさそうである。

6.4. ロシア人日本語学習者の日本語学習による日本語使用への影響

日本人であっても、また日本で生活していても、フランス語を学んでいる学生はフランス的な印象を、ドイツ語を学んでいる学生はドイツ的な印象があるとよく言われる。つまり、外国語を学ぶと、母語の環境でも、学習対象言語の社会・文化的な影響が見られるようになるという意味である。この現象は、目標言語の文化へ順応しようとする傾向として捉えられよう (Kasper & Blum-Kulka,

1993を参照)。繰り返しになるが、社会・文化的規範と使用言語 (R_i) の影響は、「疎」の間柄で主に見られる影響要因である。

「疎」の条件で、日本語使用においては日本語母語話者と類似した傾向を示した場面が3つあった。それらは、断り難さではアルバイト先で代理出勤を頼まれる場面5、バーベキューの買い出しを頼まれる場面8、依頼への配慮で講義ノートを貸す場面4である。これらは、ロシア語だと比較的断り易い場面であった。しかし、日本語の場合は、親しくない相手に対して丁寧に接するべきだという意識が働いて、日本人と同じになったのであろう。日本語を学習したことによる適応の結果だと思われる。ただし、多くの場面でロシア語母語話者との類似性が見られたので、ロシア人は基本的には民族的アイデンティティを維持しながら、日本語を習得しているのではないと思われる。

7. おわりに

本研究ではロシア人日本語学習者を対象に、日露の文化差と学習言語の影響に着目して、依頼の断り難さ及び依頼者への配慮を構成する諸要因を検討した。従来の研究(例えば、Hill, Ide, Ikuta, Kawasaki, & Ogino, 1986; 井出, 2006; Matsumoto, 1988, 2003)で議論されてきた社会・文化論的な影響を、本研究では、社会・文化的規範と使用言語 (R_i) として検討した。その影響は、基本的に依頼の場面や内容 (R_j) に応じて複雑に絡み合いながら見られる現象であり、一貫して強く影響する要因ではないことを示した。以上のように、本研究では、ポライトネス理論の普遍性を支持した上で、さらに諸要因の階層的な影響関係を示した。日本語を学習するという経験は、依頼の断り難さと依頼者への配慮の必要性の判断に少なからず影響することが分かった。

ロシア人日本語学習者は、社会的距離と力関係という強い要因の中で、ロシア文化に根ざしたロシア人としてのアイデンティティを保っている。個々人のアイデンティティはパーソナリティーの中核的なものであり、簡単に変容するものではない。しかし、社会・文化的な違いが、日本語のコミュニケーションにおける微妙な誤解を生み出す

こともある。ロシア人としてのアイデンティティを保持しながら、場面に応じた効率的かつ適切な日本語表現が使えるようになるために、語用論的な観点を日本語教育に持ち込む必要があるだろう。

注

- 1) ロシア語版と日本語版の質問紙で、依頼者がロシア人であるか日本人であるかは指定しなかった。日本語を学習していないロシア人は、ロシア語版でロシア人を依頼者と考えられ、また日本語を学習しているロシア人も、おそらくロシア語版ではロシア人を想定したと思われる。しかし、日本語版で、日本人を想定したとは言い切れず、ロシア人の依頼者を想定したことも十分に考えられる。しかし、本研究では、テスト段階でロシア人か日本人かを指定しなかったため、この点は考慮しないで議論する。
- 2) 回帰木分析は、交差確認を繰り返すことで木の剪定を行い、ノード数を確定して、樹形図の形でモデルを構築し、学習データ以外のデータについて予測と判別を行うことを目的としている。しかし、本研究では、あくまで得られたデータの検討に留めている。樹形図で描かれたモデルの予測および判別力については、今後の課題としたい。

参考文献

- Beebe, L. M., Takahashi, T., & Uliss-Weltz, R. (1990). Pragmatic transfer in ESL refusals. In R. C. Scarcella, E. S. Andersen, & S. D. Krashen (Eds.), *Developing communicative competence in a second language* (pp.55-73). New York: Newbury House.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1978). Universals in language usage: Politeness phenomena. In E. N. Goody (Ed.), *Questions and politeness* (pp.56-289). Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some Universals of Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ブラーエヴァ・マリア (2012) 「ロシア人日本語学習者が依頼に対する「断り」のストラテジーを選択する諸要因」日本語用論学会第15回年次

- 大会『大会発表論文集』（第8号），145-153.
- Hall, E. T. (1976). *Beyond culture*. Garden city, NY: Anchor Books.
- Hill, B., Ide, S., Ikuta, S., Kawasaki, A., & Ogino, T. (1986). Universals of linguistic politeness: Quantitative evidence from Japanese and American English. *Journal of Pragmatics*, 10, 347-371.
- Hofstede, G. (1980). *Culture Consequences: International Differences in Work-related Values*. Beverly Hills, CA: Sage Publications.
- Holtgrave, T., & Yang, J. N. (1990). Politeness as universal: Cross-cultural perceptions of request strategies and inferences based on their use. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 719-729.
- Houck, N., & Gass, S. M. (1999). *Interlanguage refusals: a cross-cultural study of Japanese - English*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 井出祥子 (2006) 『わかまへの語用論』大修館
- 伊藤恵美子 (2001) 「ポライトネス理論の実証的考察—心理的負担の度合いを中心に意味公式の数値の観点から—」, 『日本語教育論集』17, 1-20.
- 伊藤恵美子 (2002) 「マレー語母語話者の中間言語に見られる語用的特徴：断り表現における普遍性と特殊性」, 『ことばの科学』15, 179-195. 名古屋大学言語文化研究会
- Kasper, G., & Blum-Kulka, S. (1993). *Interlanguage Pragmatics*. New York: Oxford University Press.
- Kiyama, S. (2011). *Facework in conflict situations: A multivariate analysis focusing on native speakers of Japanese*. PhD dissertation, Reitaku University.
- Kiyama, S., Tamaoka, K., & Takiura, M. (2012). Applicability of Brown and Levinson's politeness theory to a non-Western culture: Evidence from Japanese facework behaviors. *SAGE Open*, 1-15.
- Larina, T. V. (2009). *Kategoriya veshlivosti i stil' kommunikatsii: Sopostavlenie russkikh i angliiskikh lingvokulturnykh traditsii*. [Category of politeness and communication style: Comparison of Russian and English linguacultural traditions]. Moscow: Rukopisnye pamyatniki Drevnei Rusi.
- Lim, T. S., & Bowers, J. W. (1991). Facework, solidarity, approbation and tact. *Human Communication Research*, 17, 415-450.
- Matsumoto, Y. (1988). Reexamination of the universality of face: Politeness phenomena in Japanese. *Journal of Pragmatics*, 12, 403-426.
- Matsumoto, Y. (2003). Reply to Pizziconi. *Journal of Pragmatics*, 35, 1515-1521.
- 村井卷子 (2009) 「断り行為における好感と不快感を決定する要因は何か—『スピーチ・レベル』と『方略』の二つの方策から—」, 『筑波大学地域研究』30, 17-30.
- 中根千枝 (1978) 『タテ社会の力学』講談社
- Prohorov, Yu. E., & Sternin, I. A. (2007) *Russkie: kommunikativnoe povedenie*. [Russians: communicative behavior]. Moscow: Flinta - Nauka.
- Raitmar, R. (2003) *Pragmatika izvinieniya: sravnitel'noe issledovanie na materiale russkogo yazyka i slavyanskoi kul'tury*. [Pragmatics of apology: comparative research based on Russian language and Slavic culture resources]. Moscow: Yazyki slavyanskoi kul'tury.
- レンティエラ・ワンウィモン (2004) 「タイ人日本語学習者の「提案に対する断り」表現における語用論的転移—タイ語と日本語の発話パターンの比較から—」, 『日本語教育』121, 46-55.
- 清水崇文 (2009) 『中間言語語用論の概論』スリーエーネットワーク
- 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』研究社
- Tamaoka, K., Lim, H., Miyaoka, Y., & Kiyama, S. (2010). Effects of gender-identity and gender-congruence on levels of politeness among young Japanese and Koreans. *Journal of Asian Pacific Communication*, 20, 23-45.
- Tateyama, S. (2001). Explicit and implicit teaching of pragmatic routines: Japanese *sumimasen*. In K. R. Rose, & G. Kasper (Eds.), *Pragmatics in Language Teaching* (pp. 200-222). Cambridge: Cambridge University Press.
- 鄧曉梅 (2012) 『台湾人日本語学習者の敬語習得—敬語使用基準と敬語に関する情意的要因を中心に—』南山大学博士論文

資料 依頼に対する断り難さと依頼者への配慮の
場面の例（表 1 の場面 2 より）

(1) 親しい間柄の指導教員の授業が終わった後、あなたはその指導教官に研究室の引越しの手伝いを頼まれました。

⇒相手の依頼を断る時のあなたの意識について聞かせてください。

1) 断わり難さについて

この場面の依頼はどのぐらい断り難いですか。最も断り難い場面を 7 とし、最も断り易い場面を 1 とします。数字に○をつけてください。

2) 配慮について

あなたは断るときに、どれぐらい相手のことに配慮しましたか。最も配慮しながら断った場合を 7 とし、もっとも配慮しないで断る場合を 1 とします。数字に○をつけてください。

1) 依頼の断り難さ	とても 断り易い 1__2__3__4__5__6__7	とても 断り難い 1__2__3__4__5__6__7
2) 依頼者への配慮	配慮しない 1__2__3__4__5__6__7	配慮する 1__2__3__4__5__6__7

Factors Comprising the Difficulty of Refusing a Request and the Degree of Consideration Toward the Hearer by Russian JFL Learners: From the Perspective of the Politeness Theory

by

Maria E. BULAEVA

Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University

Katsuo TAMAOKA

Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University

Within the framework of Brown and Levinson's (1978, 1987) politeness theory, this study examined how the learning of Japanese can influence the perception of politeness factors in a request refusal situation of native speakers of Russian. We focused particularly on the degree of difficulty as well as the degree of consideration a speaker gives towards the hearer's face in the refusal situation. According to Brown and Levinson's politeness theory, the weightiness of a face threatening act (W_x) is calculated as $W_x = D(S, H) + P(S, H) + R_x$, where D is the social distance between interlocutors, P is the power relations between interlocutors, R_x is the cultural and situational context, S is a speaker, and H is a hearer. In this study we assumed R_x from two perspectives: the intrinsic content of the situation (R_i) and differences in language/linguaculture (R_l). We used a regression tree analysis to reveal the hierarchical relations of these four factors (D , P , R_i , and R_l) when predicting the difficulty to refuse a request and the level of consideration one gives towards their hearer's face. The following factors were observed in our study: the influence of L2 (Japanese) onto L1 (Russian), the maintenance of Russian national identity, and the accommodation to the target language culture.

Key words: refusal, regression tree analysis, difficulty to refuse a request, degree of consideration toward hearer, politeness